

本丸（御殿礎石、天守、着見櫓跡）

本丸

本丸は城の複合施設の中核に当たる。本丸は彦根山の頂にあり、複数の石垣で保護され、3つの同心円状の堀に囲まれており、防御の兵士たちが最後の陣地を築けるようになっていた。彦根藩主の井伊直孝(1590-1659)は、1622年に彼の私有邸宅（表御殿）が完成するまでここに住居を構えていた。本丸にはいくつかの櫓があった。本丸は明治時代（1868～1912年）の廃城令の解体から救われたが、これらの他の建物は解体され、礎石のみが残っている。

天守

最も内側の部分が天守であり、城の周囲のパノラマを見晴らす格好の場所で、また、武器や甲冑を保管するために頻繁に使用されていた。1606年に完成したこの天守は、主に45km離れた琵琶湖の南西側にある大津城から船で運ばれた材料を使用して建てられたと考えられている。建築資材は琵琶湖の南西側45キロ離れた場所から舟で運ばれた。立派な城郭を備えた彦根城、姫路城、大阪城などの城は、一般的に将軍の元に国が統一されて大規模な戦争が珍しくなった江戸時代（1603-1867）に建てられたものである。これらの城は、要塞として、またその土地を治めた大名達の権力の象徴としての両方のデザインで以て設計された。国宝である彦根城の天守閣は井伊家の富と業績を示している。

太鼓門櫓

太鼓門櫓は、本丸の正面玄関に通じる防御の砦であった。櫓には太鼓が備えられており、城内での通信に使用されていた。

月見櫓

月見櫓は二階建ての砦で、城郭の最上部にあった。1868年に取り壊された。櫓の内

側から、歩哨が城の北東部を監視していた。